

## 絶対敬語 確認テスト（奏す・啓す） | 定期テスト対策 | 誰でも古典塾 解答・解説

---

問1 天皇（帝）。広く解釈する場合は上皇・法皇に用いる例もあるが、原則として「奏す＝天皇に申し上げる」と押さえる。

問2 「この事情を、詳しく帝に申し上げる。」（「由」＝事情・わけ、「つぶさに」＝詳しく）

問3 皇后・中宮・東宮（皇太子）・皇太后。「奏す」が天皇への言葉であるのに対し、「啓す」は天皇に次ぐ最高貴族への言葉と覚える。

問4 絶対敬語。使う相手が完全に固定されている敬語表現のこと。

問5 相対敬語。文脈の中で誰を高めているかを判断する必要がある、ふつうの敬語のこと。

問6 謙譲語。動作の主体（申し上げる人）を低めることで、言葉の受け手（帝・中宮など）を間接的に高める語だから。「天皇に使うのだから尊敬語」と誤解しやすいので注意。

問7 サ行変格活用。「奏せ・奏し・奏す・奏する・奏すれ・奏せよ」と活用する（「啓す」も同じ）。

問8 本動詞。「申し上げる」という動作そのものを表している。

問9 尊敬語・補助動詞・大納言（動作の主体）への敬意。「～なさる」の意を添えている。

問10 作者（書き手）から帝への敬意。地の文の謙譲語は、作者から動作の受け手への敬意を表す。

問11 「大納言は、歌を詠んで帝に申し上げなさる。」（「奏し」で帝を、「給ふ」で大納言を高めている）

問12 東宮（皇太子）。「啓す」の受け手は皇后・中宮・東宮・皇太后に限られる。

問13 「申す」は受け手が誰であっても使える謙譲語（例文⑦では大臣）だが、「奏す」は受け手が天皇（帝）に固定されている。相手が決まっているか否かが、相対敬語と絶対敬語の違いである。

問14 未然形。下に打消の助動詞「ず」（未然形接続）が続いている。

問15 連体形。下に体言「人」が続いている。

問16 已然形。下に接続助詞「ば」が付き、已然形＋「ば」＝確定条件（～すると）を表している。

問17 中宮に申し上げるのに「奏す」を使っている点が誤り。「奏す」は天皇（帝）専用なので、「このこと、中宮に啓す。」と直す。

問18 イ・ウ。ア（帝）には「奏す」を用いる。エ（摂政）・オ（大納言）は臣下なので、「申す」「聞こゆ」などのふつうの謙譲語を用いる。

問19 「啓し」＝中宮への敬意（謙譲語は動作の受け手を高める）。「給ふ」＝女御への敬意（尊敬語は動作の主体を高める）。一文の中で受け手と主体の両方を高める「二方面への敬語」である。

**問20** 意志（～しよう）。「(政のことを帝に) 申し上げようと思って」。「とて」＝～と思って・～と言って。

**問21** 天皇（帝）に申し上げたと判断できる（広くは上皇・法皇を含めることもある）。受け手が固定された絶対敬語なので、相手の名前が書かれていなくても「この言葉は帝に向けられたものだ」と人物関係を即座に特定でき、会話の相手や場面を正確に読み取る決め手になる。